

対談 波多野光男×野村義男

人生を狂わせたオーソリティとの語らい

PROFILE
波多野光男 (はたの・みつお)

1956年、栃木県生まれ。78年にMUSIC LAND KEY 東京店(現・新宿店)でアルバイトを始めたのをきっかけにギターの仕事に携わり、“ハタ坊”として同店の広告にも登場。89年、世田谷にてビンテージ・ギター専門ショップ、BOW'S GUITAR GALLERYを立ち上げる。野村の発案によるエクスプローラー・シェイプの巨大テーブルが置かれた同店は、愛好家の良き溜まり場であった。フェンダーの研究者・コレクターでもあり、現在でも第一人者であり続けている。



●二人のお付き合いが始まったのはいつ頃ですか？

野村 中学2年の時に、たまたまお小遣いを持ってギターを買いに行ったんです。それが新宿のKEY。大学生だったハタ坊はそこでバイトしてた。グレコのブライアン・メイ・モデル(BM-900)を買いたくて入ったら、“ない”って言われたの。

波多野 その頃、BM-900ってグレコの中でもプロジェクト・シリーズの一本で、数が少なかったのね。だから、たまたまその時も在庫がなくて。

野村 だけど、これがあるよって、エース・フレアー・モデル(P75)を出してきた。僕はクイーンのコピーをやりたくてブライアン・メイを買いに行ったのに(笑)。“今これを買ったら、ハードケースを付けるよ”って言うわけ。それで買って、キスのコピーを始めちゃったの(笑)。そこで人生狂った。ロックンロール方面に(笑)。それからだよ。

波多野 知り合って数十年たつけど、未だにただのギター小僧と店員。

野村 弦やピックはもちろん、パーツやピックガードなんかも買いに行き、そこでいろんなことを教わった。“こういう改造をしてみたいんだけどできる？”って次々聞くと、こうすればいいって教えてくれる。

波多野 一緒になって面白がってただけなんだよな。

野村 そうそう。そんなことしてると、“こんなの入ったぜ”って奥からギターが出てくる。“スッゴイ、テレキャス”っていうと、“いや、エスカイヤー”みたいな。“何が違うの？”、“フロントのピックアップがないだろ”って、そんな風にやってきた。

波多野 今は俺より詳しくなってる。でも、覚えている最中は俺のが詳しい時期もあるわけじゃん。ザ・グッバイのツアーが始まって、全国に行けるようになると、そこら中の楽器屋に行くわけ。そうすると、変なのが売ってたって必ず電話がかかってくる(笑)。

野村 今、沖縄の質屋にいるんだけど、“これ買い？ それとも見送り？”みたいなことがしょっちゅう。

波多野 最初は地下鉄で店に来てたんだ。それがバイクの免許とってバイクになって、そのうち車の免許とると、車で来るようになるわけ(笑)。

野村 16歳でバイク、19歳で車になるわけですよ。車になった途端に、“芝浦のスタジオにアンプを届けなきゃいけないから、車出して”って言われて、僕がKEYの楽器車になったり(笑)。

波多野 やらせたね(笑)。

野村 そうこうしてるうちに、ジャニーズ事務所を辞めて、このあとどうしようっていう時に、時間がいっぱいできたから、また毎日のように行くようになって、行くたびに店の裏にあった喫茶店でご飯食べさせてもらった。ほぼそういう状況。**波多野** だから納品もさせられる(笑)。

野村 時間があると二人で東京中の楽器屋を回るの。ハタ坊も楽器業界ですごい有名人だから、行く店行く店で店員が寄ってきて、あれこれ話しかける。“こないだ買い取ったギター見てくれませんか？”とか。そうすると、ねじが違うとかピックガードが新しいとか答えてるんだけど、こっちは意味がわからないわけ(笑)。その横で僕は店のギターを見てたりとか。そんな風にたくさんさんの楽器屋さんを回っていたら、“野村義男はハタ坊の回し者”っていうんで値引き率をよくしてくれたりして。楽器屋さんで買いやすくしてくれたのはハタ坊だから。あと、東京の楽器屋で店員さんだった人たちが、地方に転勤になったりもするわけ。そういうので、日本中の楽器屋さんでラクチンな待遇を受けることができた。

●波多野さんはのちに世田谷でBOW'S GUITAR GALLERYというビンテージ・ショップを立ち上げましたね。野村さんの行くところが一件増えました(笑)。

野村 そう。ギターを見に行くにはこっちのほうが面白いわけ。B.C.リッチのダブルネックがテーブルの下から出てきたりするから(笑)。

●そこからも長い付き合いになると思うのですが、そんな波多野さんから見た野村さんのギターに対する入れ込み方をどう思いますか？

波多野 行き過ぎ(笑)。

野村 未だに言うよな、ただのB級好きって。

波多野 モノっていうのは、好きなモノを好きなように買うのが本来の買い方ですよ。だから義男も好きなギターを好きなように買ってたわけ。そうすると、変なものがいっぱい集まってくるわけよ。そ

のまま行っちゃうとキリがないし収拾もつかなくなる。でも、買える時に王道を押さえたほうが絶対いいと思うから、B級野郎って言われないうちに王道を押さえてからにしよとアドバイスした。これを持ってれば、それ以上突っ込まれなくなるようなものは押さえますよと。

野村 例えばビザールだけにこだわる人いるでしょ。それはそれでいいと思うんだけど、ビザールも好きでフェンダー、ギブソンも好き。だったらちゃんと全部押さえればみんなが納得するっていう話なの。だから、気が付いたらハタ坊が知らないようなビザールものもいっぱい持ってて。

波多野 今となっては義男が買って来たから見ることでできたギターも何本もある。“普通そこに手を出さないよな、でも買って来たなら見せて”みたいな(笑)。

●野村さんはギターの知識がすごいですよね。英語の文献などもたくさん読んでいますし。

波多野 本当に好きだから、興味を持って見るから、それが知識になっていくし覚えられる。興味がないと、数を見ただけでは、知識として身につかないよね。そこをちゃんとやっているとところがすごい。

●必ずモノを見て語りますよね。

野村 そうそう、買わないと絶対に知ることはできない。オールドのストラトを知りたくて、3日間借りたところでわかんないと思う。買って手に入れて初めて価値がわかるんです。

波多野 あと、集めるだけじゃなくて、楽器として使えるものを買うんだよね。そこはすごい。俺なんかは明らかにコレクターなの。弾くギターと集めるギターを完全に分けてるんだけど、義男は基本的に全部弾く。そこがすごいよ。

●一緒にギターを買いに行ったことはあるんですか？ 例えばアメリカとかに。

波多野 それ、一回やろうよって言うんだけど、スポンサーがない(笑)。行きたいよね。楽器屋さん自体も少なくなっちゃったし、ギターショーに行くしかないよな。

野村 逆に言うと、楽器屋に行っちゃいけないんだよ。ポーンショップ巡りがいい。

波多野 でも、質屋にもないよ。

野村 いや、それは違う。オールドのこ

と云ってるでしょ。そこがダメなんだよ。ポーンショップにはフェンダー、ギブソンはもう置いてないかもしれないけど、フェンダー、ギブソンは日本で買ったほうがいいって。だって、日本のほうがあるんだもん。じゃなくて、日本に入れられないギターを買いに行く。コスト的には日本に入れられないギターを買って、手持ちで帰ってくる。高いギターは今や日本のほうがいっぱいあるハズだから。だからハタ坊に言わせると“Bな”ギターを見てみたい。知らないギターがいっぱいあるから。

波多野 アメリカには人と違うものが欲しいっていう客のほうが多いから、なんでこんな在庫でやってけるんだろうっていうような店が今でもあるのよ。そういう店に行きたいね。

野村 ロスのブラック・マーケット・ミュージックは最高だったね。そこでエース・フレアーのヴェレノ(P116)を買ったの。

波多野 あれは、義男が買う前に俺がサンフランシスコで見たの。サンフランシスコにちょっと危ないエリアがあって、その店は最初そこにあった。名前からしてヤバそうじゃん。あえて汚いレンタカーを借りてそこに行ったら、そのヴェレノがあったんだけど、輸入してもコスト的に合わないなと思って見送ったんだ。何年かしてロスに移転した店で義男が見つけた、そこで買って来た。

野村 そうそう。その店は僕が行った時はすごく、白いレス・ポール・スタンダードがあったの。おまけに金のパインディングが付いてる。グレッチ好きがオーダーしたんだと思うんだけど、それが飾ってあって。あとダブル・カッタウェイのテレキャス。ストラトじゃなくてテレキャスなんだ(笑)。でも、ああいうところは店の中は写真撮れないから、目に焼き付けるしかなくて。それを帰ってきてハタ坊に伝えたら、“ないよそんなの！”って言うんだけど、“俺は見ただ！”みたいな。そういう会話を飲みながら延々やってる(笑)。だから、アメリカにはまだきつと何かがあるんだ。

●ギター話は尽きませんね。それでは最後に野村さんにエールを。

波多野 ギター・ファンに影響力を持つギタリストであってほしいね。これからも情熱を失わずに。